
あなたの・・・トコロにも・・・

セラ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナタの・・・トコロにも・・・

【Nコード】

N0754B

【作者名】

セラ。

【あらすじ】

まず、この物語を見られる方に・・・1つだけ忠告しておきます・・・この話を見る事は別に構いません・・・自由に見て行って下さい・・・しかし・・・アナタも・・・彼らのように・・・抜け出せなくなるかもしれませんよ・・・？』それでも、アナタはこの話を・・・『聞きますか・・・？』

プロローグ

今の時刻は、11時過ぎ・・・
辺りは、漆黒の闇に包まれ、時折聞こえてくるのは虫の鳴き声だけ。
・
・

「なあ・・・本当に行くのか？」

「当たり前だろ？」

俺の名前は、藤堂 海。

A高校に通っている、17歳の学生だ。

今、俺は友人の「夏といえば・・・」と言っありきたりな提案で、
廃病院に肝試しに来ている・・・

「それにしても・・・この病院の経営者って、何でこんな所に病院
なんて建てたんだ？

ここじゃ、すぐに潰れるだろ・・・」

「・・・確かにな・・・」

今、俺達がいる場所は・・・山の中・・・それも、かなり山の奥の
方に入っていった所だ。

病院があると言つ事で、さすがに道は舗装されていたもの・・・
こんな山奥に患者がやってくるとは到底思えない・・・

「・・・って、こんな所で病院眺めてたって始まらないし、さっさと中に入るぞ」

「え・・・あ、ああ・・・」

俺は、この時この空間には場違いな「ある違和感」を感じていたのだが・・・

友人が、もう病院に向かって歩き始めていた為、話を切り出せずに病院の中に入って行く事になった・・・

第1章 音信不通・・・

・・・

『・・・お掛けになった電話番号は、電波の届かない場所にあるか、電源が・・・』

「・・・あーっ！！くそっ！！海の奴何やってんだよ！！」

俺の名前は、仁戸田 雅彦。

A高校に通っている17歳の学生だ。

俺と、藤堂 海は高校の同級生で、普段から良く遊んでる友人なのだが・・・

その、「藤堂 海」に1、2ヶ月程前から全く連絡が付かなくなっていた。

俺が最後に海と話したのは・・・

夏休みが始まる前日・・・終業式の日の事だ・・・

その、内容は・・・

『山の奥にある、廃病院に肝試しに行くから、一緒に来ないか？』
と言う物だった・・・

しかし、俺はその日用事があつた為一緒に行く事は出来無かつた。

そして、その次の日から海と連絡が取れなくなつた・・・

(・・・もう1回、海のアパートに行つてみるか)

今は、夏休みも終わり普通に授業が始まっているのだが、今日は日曜という事だったので、俺は海の住んでいるアパートに行く事にした。

ちなみに、海はアパートで一人暮らしをしている。

俺は、1、2週間前にも海のアパートに足を運んだりしてたのだが・
・

結局、海の姿を見る事は出来なかつた・・・

「ピンポン・・・」

チャイムを鳴らしてみるが、その後に残るのは静寂だけ・・・

俺は、無駄だと分かっているながらもドアに手を掛けノブを回してみ
るが、鍵が掛かっているようでドアは開かない・・・

その時、ふいに横から誰かに話し掛けられた・・・

「あんた・・・藤堂さんの知り合いかい？」

俺が横に視線をずらすと、そこには60代前後に見えるおじいさん
が立って、こちらを不審そうに見ていた・・・

「あ・・・はい。俺、藤堂の友達の仁戸田って言います。

随分前から藤堂と連絡が付かないんで、心配になって来てみたんで
すけど・・・いないみたいで・・・」

「うーん・・・藤堂さんなんだけどね・・・

7、8月分の家賃滞納してて、こっちも困ってるんだよ・・・」

どうやらこのおじいさんは、このアパートの大家さんのようだ。

この大家さんの言い方だと、やっぱりアパートにもずっと帰って来
ていないようだ・・・

「あの・・・もし良かったら、合鍵で藤堂の部屋ちょっと開けて貰えないですか？」

何ヶ月も連絡取れなくて、さすがに俺も心配なんで・・・」

俺がそう言うと、大家さんは一瞬困った様な顔をしたが、「大家さんも一緒に部屋に入る」と言う事を条件にして了承して貰えた。

大家さんが、鍵を取って来る間俺は海のアパートの前で一人佇んでいたのだが・・・

何か、妙な音が聞こえてきた・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その音が何か聞き取る事は出来ないが、その音が出て来た場所は分かっていた・・・

海の部屋からだ・・・

第2章 不安・・・

(なんだ・・・この音・・・)

俺は、海の部屋のドアに耳を当て・・・
その音の正体を探ろうとしたのだが・・・それは、合い鍵を持って
来た大家さんによって中断された・・・

「・・・それじゃ、開けるよ。」

そう言っ、大家さんは鍵を外し・・・海の部屋のドアを開けた・・・
しかし、そこには海の姿は無く・・・テレビや机に埃が溜まってい
て、この部屋に居住者がしばらくいなかった事を表しているだけだ
った・・・

ここで、俺はさっき聞こえていた音が何処から聞こえてきたのか調
べようとしたのだが・・・

その音は、俺達がこの部屋に入って来た瞬間に途切れてしまってい
た為・・・結局何だったのか分からなかった・・・

「うん・・・この様子だと、しばらく帰って来てないみたいだね」

「・・・そうですね・・・すみません。ご迷惑かけました・・・そ

れじゃあ、俺帰りますんで・・・」

そう言うと俺は、アパートを後にした・・・

(・・・家にも帰ってないし・・・電話も繋がらない・・・もしかしたら、何かの事件に巻き込まれてたり・・・)

俺は、自分の家に帰ってからそんな事を考えていたが・・・ベッドで寝ながら考えてたせいか、いつの間にか寝てしまい・・・

目が覚めた時には、もう朝になっていた。

「ふああゝ・・・あ・・・」

俺は、まだ眠たい体を無理やり起こし、高校に向かう事にした・・・

俺は、教室に入るとすぐに海の姿を探したが、海がいる訳も無く・・・自分の席に、顔を突っ伏して座っていると、担任が入って来たのか出席確認を始めていた。

「うゝん・・・今日も、藤堂と井上は休みか・・・誰か、あいつらから休みの理由聞いてる奴いないか？」

(・・・藤堂と・・・井上「・・・」?)

俺は、伏せていた顔を上げ、教室の中を見回してみた・・・

すると、確かに海の場合意外にも空いている席が1つある・・・

そこで、俺はある事に気付いた・・・

いや、今まで気付かなかったのがおかしかったのかもかもしれない・・・

海が俺の所に肝試しを誘いに来た、あの時・・・

海の横に・・・「誰が居た？」

そう・・・海の横には確かに井上が居た・・・

おそらく、井上も肝試しに行ったんだろう・・・

俺は、今まで分からなかった疑問が解け始めるのを感じるのと同時に、不安を覚えた・・・

海と井上は、あの日肝試しに行った廃病院で「何か」あったんだ・・・だから、一緒に行った井上も学校に来てない・・・

俺は、その「何か」が何なのか分からないが大体の予想は付く・・・

海達は無事では無い・・・いや。もしかしたらもう・・・

俺が、そんな最悪の状況を頭の中にえがいていると・・・ふいに、携帯が震え始めた・・・

俺は、担任に見つからないようにポケットから携帯を取り出し、画面を見てみると・・・

「メール受信」

「藤堂 海」

と表示されていた・・・

第3章 ホームページ・・・

「っ!?!」

俺は、その文字を見てもしばらく受信メールを見る事が出来ず、携帯を片手に固まっていた・・・

この状況を理解するまでにしばらく時間が掛かっていた為だ。

(海から・・・!?!?)

俺は、混乱する頭を無理やり抑え、海から来たメールを開いてみた・・・

するとそこには、タイトルと本文は無く・・・

何故か、ホームページのURLだけが書いてあった・・・

それを見て、さらに俺は混乱する事になったが・・・

俺は、自分でも気付かない内に、そのURLにアクセスしていた・・・

俺の意思とは関係無く、指が動いていたのだ・・・

受信メールの画面から、インターネットの画面へと切り替わり・・・

そのURLのホームページが開かれた。

(・・・?)

・・・なんだこれ?)

携帯に表示されたページは、画面全体が真っ白なホームページだった。

俺は、不思議に思いながらも画面を下へとスクロールさせていると・・・

ちょうど、画面の中央辺りにある数字が書かれていた・・・

「2006.7.24」

(・・・7月24日は・・・終業の日・・・
そして、海達が肝試しに行った日・・・)

俺は、嫌な予感がしながらもその数字の部分をクリックした・・・
すると、今度は赤い背景に黒い文字で・・・

「7.24 - PM 23:12・・・

・・・
「・・・

日付けと共に、何か小説の様な文章が一面に表示されていた・・・

「・・・おい？仁戸田？次の授業、体育だぞ？着替えなくて良いのか？」

俺が、携帯の画面とにらめっこしていると、後ろから同じクラスの奴に放し掛けられた為、意識が現実に戻された。

「・・・えっ？あ、ああ・・・今から着替える。つて、あと3分しかねえじゃん!？」

俺は、急いで着替えて授業に向かったが、今日の授業は全く身が入らなかった。

海から送られてきたメールと謎のホームページの事を、ずっと考えていたからだ・・・

ようやく、学校も終わり・・・俺は、急いで家に帰りもう1度あのURLにアクセスした・・・

俺は、昼休みに見てみようかと思っていたのだが、学校では色々と邪魔される事がある為、家に帰ってからアクセスする事にした。

もちろん、休み時間に海にメールの意味を聞こうと、電話を試みたが・・・結果は、いつもと同じで繋がる事は無かった。メールも、送ったりしたのだが返信はまだ返って来ていない。

携帯の画面に、また真っ白な画面が映し出される・・・俺は、朝と同じように画面をスクロールさせ、もう一つのページへとジャンプした。

「7・24・PM 23:12・・・」

今の時刻は、11時過ぎ・・・
辺りは、漆黒の闇に包まれ、時折聞こえてくるのは虫の鳴き声だけ・・・

『なあ・・・本当に行くのか？』

『当たり前だろ？』

俺の名前は、藤堂 海。

A高校に通っている、17歳の学生だ。

今、俺は友人の「夏といえば・・・」と言っありきたりな提案で、
廃病院に肝試しに来ている・・・

（なんだこれ・・・？

肝試し？廃病院？・・・

それに、話の中に出て来てるのって、海の話だよな・・・）

俺は、この疑問を解く為にさらに読み進めて行く事にした・・・

第4章 廃病院・・・

『それにしても・・・この病院の経営者って、何でこんな所に病院なんて建てたんだ？ここじゃ、すぐに潰れるだろ・・・』

『・・・確かにな・・・』

今、俺達がいる場所は・・・山中・・・それも、かなり山の奥の方に入っていった所だ。

病院があると言う事で、さすがに道は舗装されていたもの・・・こんな山奥に患者がやってくるとは到底思えない・・・

『・・・って、こんな所で病院眺めてたって面白くないから、さっさと中に入るぞ』

『・・・ああ・・・』

俺は、この時この空間には場違いな「ある違和感」を感じていたのだが・・・

井上が、もう病院に向かって歩き始めていた為、話を切り出せずに病院の中に入って行く事になった・・・

俺は、井上の後を追って病院の中に入って行ったのだが・・・俺は、その廃病院の中を見て、さらに別の違和感が出て来た・・・

『・・・なあ？井上？ここって「廃病院」なんだよな？』

『あ、ああ・・・そのはずなんだけど・・・』

この廃病院の中は驚く程、綺麗だったのだ・・・

整然と並べられている椅子・・・

ゴミどころか、ほこり一つ落ちていない床・・・

受付は今にも、看護婦さんが顔を出してきそうな雰囲気さえある・・・

そう、まるで昨日まで人がいた病院から、急に人がいなくなったかと思わせるような・・・

『・・・確か、ここ随分前に経営不振か何かで、つぶれてるはずなんだけど・・・』

俺達は、疑問を抱きながらも廃病院の中を見て回る事にした・・・

病室・・・

手術室・・・

霊安室・・・

肝試しで行くであろう全ての場所に行ったが・・・
中が綺麗だった為か、そんなに恐怖心は出なかった。

『なんか、期待はずれだったな』

『確かにな。もうちょっと、落書きとかあれば雰囲気出るんだろうけど』

俺達が、そんな会話を交わしながら歩いていると・・・

俺は、急に外で感じていた違和感の事を思い出し、井上に話してみる事にした・・・

『あ、そうだ！なあ、井上？

今、この場所にいるのって俺達だけなんだよな？』

『ん？まあ。そりゃそうだろ。他にも誰か来てんのか？』

『いや。何か、外に自転車とかバイクが何台か停めてあったからさ・・・

俺達意外にも誰か来てんのかな・・・って』

『あゝ。じゃあ、誰か先約いるのかもな。』

・・・ってか、そろそろ帰るか？もう大体の所は見終わったしな』

『ああ。そうだな。それより、井上？

お前、帰り道分かるか？』

『・・・いや。』

この、廃病院は何故か迷路のような作りになっていた為、俺達は帰り道が分からなくなっていたのだが・・・
歩いていれば、そのうち入り口に着くだろ。と言う事で、俺達は廃

病院内を適当に歩き始めた・・・

あれから、一体どれだけ時間が経っただろう・・・

俺は、歩き過ぎたせいかな段々、足の裏が痛くなって来ていた・・・

『・・・なあ？俺達、一体 何時間歩いてんだ？』

『・・・多分、最低でも1、2時間は歩いてるな・・・』

『・・・って、ここってさっきも来なかったか？』

『・・・あつ。・・・確かに・・・さっきもここ通ったな・・・』

俺は、井上のその台詞で完全に迷ってしまった、という事を理解した・・・

『はあ・・・仕方ないか。とりあえず、ここに何か目印になる用な物を置いて行って、俺達がまたこの場所に来るのかどうか確かめろ。話はそれからだ。』

『そつだな・・・』

そう言うと、井上は自分が着ていたシャツを脱いで、床に無造作に置いた。

ちなみに井上は、Tシャツの上に半そでのシャツを重ね着していたので、今はTシャツだけだ。

俺達は、また歩き始めた・・・
しかし、2、30分程歩いた頃・・・井上が脱いで床に置いていた、
シャツが目に入って来た・・・

『・・・嘘だろ・・・？』

『・・・』

俺達は、その事実^に落胆していたのだが・・・

俺は、一つおかしな事に気付いた・・・

井上は、シャツを乱雑に脱ぎ捨てる。という感じで床に置いていたはずなのだが・・・

今は、丁寧に折りたたまれている・・・

俺は、気が付くといつの間にか、そのシャツに近づいていたのだが・・・
そこで、俺はこのシャツに近づいた事を後悔する事になった・・・

『・・・い、井上・・・』

『……ん？なんだ……』

『ちょっと、これ見てくれ……』

俺は、そう言つと井上の脱ぎ捨てたシャツを指差した……

『……っ！？』

『……なあ、井上。これって、どついう意味なんだと思
う……？』

『……そのままだろ……』

俺達が驚いているのは、床の上にある井上の白い生地シャツに
・
赤い色である文字が書かれていたからだ……

その文字とは……

『ニゲラレナイヨ』

という物だった……

終章 『ずるいよな・・・』

・・・

「・・・って、ここで終わりか・・・？」

俺が知りたいのは、この後の事なんだよ・・・!!」

このホームページに書かれていた話は、ここで途切れていた為、続きを読む事は出来なかった・・・

「・・・くそっ!!・・・!!?」

俺が、携帯を怒りに任せて投げようとした時、ふいに電話を告げる着信音が部屋の中に鳴り響いた・・・

俺は、振り上げた手を下ろし、携帯の画面を見ると・・・

着信・・・藤堂海と表示されていた。

俺は、はやる気持ちを抑えながら、受話ボタンを押し・・・携帯を耳に持つて行った。

「も、もしもし・・・?海か・・・?」

『ああ・・・今、お前の家の前にいる・・・』

『・・・玄関のドアあけてくれないか・・・?』

「・・・ああ。今、行く・・・」

俺は、携帯を持ったまま玄関に向かおうとしたのだが・・・
おかしな事に気付いた・・・

今、玄関には鍵は掛かっていない・・・
それに、なんでチャイムじゃなくて電話なんだ・・・？

(・・・)

「・・・そういえば玄関の鍵開いてるから勝手に入ってきて
良いぞ・・・？」

『・・・出来無い・・・』

「・・・出来無い？」

『・・・ああ・・・両足が無いからな・・・』

俺は携帯を耳に押し当てたまま・・・
部屋の中に一人立ち尽くしてしまった・・・

(・・・今、海は何を言ったんだ・・・？)
俺の、頭は「さっきの海の言葉」を理解しようとはしない・・・

「・・・カ・・・チャ・・・」

「・・・っ!？」

俺が、部屋で立ち尽くしていると・・・

ふいに玄関のドアが開く音が聞こえてきた・・・

『・・・今から・・・
そっちに行くよ・・・』

ドアが開く音がした後、すぐに・・・
また、携帯から声が聞こえてきた・・・

ズル・・・ズル・・・

ズル……ズル……

『……なあ……』

やっぱり……ずるいよな……』

今、俺は声を出す事が出来ない程……

頭の中を「ある感情」に支配されている……

「恐怖」

言葉にすれば、たった2つの文字……

しかし、それは時として人間の全ての機能を停止させる……

(何も、考えれない……)

(考える事が出来ない……)

(いや……何も考えたくないんだ……)

ズル……ズル……

段々、「何か」が這ってくる音が大きくなって……

(・・・大きくなってるんじゃない・・・)

(俺の部屋に近づいてきてるんだ・・・)

『・・・ずるいよな・・・』

俺達だけ・・・こんな目にあってるなんてさ・・・』

相変わらず携帯からは、声が聞こえてくる・・・

『・・・お前だけ・・・助かってるなんて・・・』

『ずるいよな!!』

恐怖がピークに達した俺は・・・
その場に倒れるように意識を失ってしまった・・・

「・・・うっうっ・・・あれっ・・・？！これは・・・」

俺が目を覚ますと、そこは病院のベッドの上だった。
他に、患者がいない所を見ると個室らしい・・・

「コンコン・・・」

俺がこの状況に戸惑っていると、ふいにドアがノックされた。

「あ、はい。どうぞ・・・」

「・・・・・・・カ・・・チャ・・・・・・・・・・」

ドアがゆっくりと開けられる・・・・・・・・

「っ!?!?」

『・・・・・・ずるいな・・・・・・・・・・お前だけ・・・・助かる
なんてさ・・・・・・・・
お前も・・・・・・・・』

『・・・・連れて行ってやるよ!?!?!?!?!?!?!?』

「・・・あれっ？仁戸田さん？」

「おい。どうしたんだ？」

「あつ。先生？」

そろそろ、検診の時間だったんで病室に来たんですけど・・・
仁戸田さんがいなくなってるんです・・・」

・・・

『・・・ふふふ・・・』

「・・・その、君も・・・ずるいよね・・・？」

『・・・見てるだけなんて・・・ずるいよね・・・』

『・・・今から、君の所にも行くよ・・・』

終章 『ずるいよな・・・』（後書き）

ども

作者のセラ。です

今回は、あえて「謎」の部分を多く残して完結させました。

って言うのも・・・

今回は、途中で仁戸田の目線になったんですけど。

次の話は、番外編みたいな物で・・・

今回の話を全部「海」目線で書いてみようと思ってまして・・・

その、話の中で今回分からなかった部分を解き明かして行こうかな。
なんて考えてます（笑）

良かったら、そっちの方も読んで頂けると、作者が泣き叫んで喜びます（笑） 危？（苦笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0754b/>

アナタの・・・トコロにも・・・

2010年12月30日04時06分発行